第1章：龍の休息、揺れる衣

「ふむ……これが『りょかん』というものか。山海経の趣とはまた違う、独特の静謐さじゃな。のう、先生？」

山あいにひっそりと佇む、老舗の温泉旅館。
通された離れの部屋に足を踏み入れるなり、キサキは物珍しそうに周囲を見渡した。
畳の匂い、床の間に生けられた季節の花、そして窓の外に広がる、夕闇に溶けゆく山々の稜線。

玄龍門の門主として、常に組織の重圧を背負う彼女の肩から、少しだけ力が抜けたように見えた。

「先生、突っ立っておらんで、こっちへ来い。妾一人がはしゃいでおるようで、少し格好がつかぬではないか」

キサキは、その小柄な体を揺らしながら、部屋の中央にある座卓へと歩み寄る。

いつもの黒いチャイナ服――龍の刺繍が施されたそれは、彼女のカリスマ性を引き立てる勝負服のようなものだが、今の彼女からはどこか年相応の……いや、いたずらっ子のような幼い期待感が溢れていた。

「……何をまじまじと見ておるのじゃ。そんなに妾の顔が珍しいか？」

視線に気づいたキサキが、形の良い眉を少しだけ跳ねさせる。
だが、その瞳には不快感など微塵もない。むしろ、熱心に見つめられることを楽しんでいるような、艶やかな光が宿っていた。

先生は苦笑しながら、彼女の隣に腰を下ろす。
「少し、リラックスした顔が見られたと思って」
そう告げると、彼女は「ふん」と鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「当然じゃ。今日は玄龍門も、山海経のゴタゴタも関係ない。……先生が、妾を連れ出してくれたのじゃからな」

そう言ってキサキは、自身の胸元に手を当てる。
リクエストされた通り、彼女の身体は、その小柄な身長からは想像もつかないほどの「果実」を抱えていた。
タイトなチャイナ服の生地が、はちきれんばかりに押し上げられ、銀色の龍の刺繍が歪むほどに強調されている。
彼女が息をつくたびに、その豊満な膨らみはゆったりと揺れ、先生の視線を奪わずにはいられない。

キサキはそんな先生の視線に気づくと、わざとらしく胸を張り、くすりと笑った。

「ほう……。先生、目が泳いでおるぞ？ 妾の姿がそんなに刺激的か？ 普段は冷静沈着な先生が、そうも余裕をなくしておる姿を見るのは……悪い気分ではないのう」

彼女は立ち上がり、ゆっくりと先生の背後に回る。
小さな手が、先生の肩に置かれた。

耳元で囁かれる、甘く、それでいて威厳のある声。

「さて。まずは、この窮屈な装束を脱ぎ捨てたいのじゃが……。先生、手伝ってくれるか？この宿の『ゆかた』というやつに、袖を通してみたいのじゃ」

慣れない「衣」と、触れ合う指先

用意されていた浴衣を広げ、キサキは少しだけ困ったような顔をした。

「……これは、どうやって合わせるのじゃ？　山海経の服とは構造が違いすぎる」

普段、玄龍門の頂点に君臨し、どんな難題も柔軟な思考で解決する彼女が、一枚の布を前にして眉をひそめている。そのギャップがたまらなく愛おしい。

先生が手伝おうと立ち上がると、キサキは素直に背中を預けてきた。

「頼むぞ、先生。妾は、こういう『外の世界の常識』には、まだ少し疎いところがあるからな」

チャイナ服の横にあるファスナーが、じりじりと下げられていく。
白い、陶器のような肌が露わになり、部屋の控えめな照明を反射して輝く。
服が肩から滑り落ちると、それまで生地に押し込められていた彼女の「重み」が、開放された。

「……っ、ふぅ。やはり少し、この服は胸が窮屈でな。先生は、今の妾を見て、どう思う？」
振り返った彼女の胸元は、下着越しでも隠しきれない圧倒的なボリュームを主張していた。
小柄な彼女が、その重みに耐えるように少しだけ背を反らす。
その拍子に、豊かな膨らみがぷるんと震えた。

「先生、顔が赤いぞ。……妾の体に、見惚れておるのじゃな？」

キサキは、からかうような笑みを浮かべながらも、その頬は薄く朱に染まっている。
先生が震える手で浴衣を着せようとすると、彼女はわざと、先生の胸板に自分の胸を押し当てるように距離を詰めてきた。

「のう、先生。……妾は、もう少し背を伸ばしたいと思っておったが。こうして先生に見下ろされ、包み込まれるような距離感も……案外、悪くないかもしれぬ」

浴衣の帯を締める指先が、彼女の細い腰に触れる。

キサキの体温が、布越しに伝わってくる。

彼女は、先生の首筋に顔を埋めるようにして、小さく吐息を漏らした。

「……温泉に入る前から、こんなに心拍が上がるとは。先生、これは妾のせいか？　それとも、先生が妾を『そういう目』で見ておるせいか？」

彼女の「先生」と呼ぶ声が、少しだけ熱を帯びる。

旅館の静寂の中で、二人の鼓動だけが、重なり合うように響いていた。

「準備はできたようじゃな。では、参ろうか。湯煙の向こうで、先生にさらなる『妾』を見せてやるとしよう」

キサキはいたずらっぽくウインクをして、先生の手を引いた。
その小さな手のひらは、驚くほど熱かった。

第2章：湯煙に蕩ける、白磁の果実と甘い棘

脱衣所の冷やりとした空気から一転、露天風呂への扉を開けた瞬間、熱を孕んだ湿気が肌にまとわりついた。
岩造りの湯船からは、乳白色の湯気がもうもうと立ち上り、夜の闇に溶け込んでいく。
チャポン、と小さな水音が響く。
先に湯に足を入れていたキサキが、湯煙の向こうでゆっくりと振り返った。

「……遅いのじゃな、先生。妾を待たせるとは、いい度胸じゃ」

その声は、湯気のように湿り気を帯びて、どこか艶めかしい。
先生が視線を向けると、そこには、この世の物とは思えない絶景があった。

彼女はまだ肩まで浸かってはいなかった。
腰まで湯に浸し、岩場に寄りかかるようにして、その身をさらけ出している。
月明かりと行灯の柔らかな光が、彼女の白磁のような肌を濡らし、光らせていた。

そして何より――その胸だ。

黒いチャイナ服の中に隠されていた時でさえ圧倒的だったその質量が、何の拘束も受けずに、重力に逆らって存在感を放っている。
小柄で華奢な肩幅や、くびれた腰つきとの対比が、あまりにも背徳的だ。
豊満すぎる双丘は、彼女が呼吸をするたびに、たっぷん、と重たげに揺れる。
先端の淡い桜色は、湯気で火照った肌の中で、ひときわ甘やかな色を主張していた。

キサキは、先生の視線が自分の胸に釘付けになっているのを見て取ると、ニヤリと口角を上げた。
まるで、獲物を絡め取る蜘蛛のように、妖艶に目を細める。

「ふふ……。そんなに呆けた顔をして、どこを見ておる？」

彼女はわざとらしく、その豊かな膨らみを両腕で下から持ち上げた。
むにゅり、と柔らかい肉が溢れ出し、谷間がさらに深く、濃い影を作る。

「昔は……そうじゃな、先生も知っての通り、もっと慎ましいものじゃったが。……どうじゃ？ 成長した妾のこれは」

キサキは誇らしげに胸を突き出し、さらに言葉を紡ぐ。

「玄龍門の長として、数多の重圧に耐え、組織を育ててきたのじゃ。……妾の体もまた、その器に見合うようにと、こうして熟れたのかもしれぬな。……それとも、先生に見られることを無意識に望んで、体が勝手に求めたのかもな？」

からかうような口調だが、その頬は朱に染まっている。
先生が湯船に入り、距離を詰めると、キサキは逃げるどころか、自ら擦り寄ってきた。

湯の中で、素肌と素肌が触れ合う。
驚くほど滑らかで、熱い感触。

「……んっ、近いぞ、先生」

口ではそう言いながら、彼女は先生の胸板に、自分の巨大な果実を押し当ててきた。
ぷるん、と弾力のある質量が、先生の肌を圧迫する。
そのあまりの柔らかさと、中に詰まった蜜のような重みに、先生の理性が軋みを上げた。

「……ふふ、心臓の音がうるさいのう。そんなに興奮しておるのか？」

キサキは濡れた手で先生の頬を撫で、じっと瞳を覗き込む。
その瞳は、普段の冷静沈着な門主のものではなく、愛を乞う一人の雌のそれだった。

「遠慮はいらぬぞ。……先生は、これを愛でる権利がある。誰よりも近くで、誰よりも深く……妾のすべてを味わうがよい」

許可が出た瞬間、先生の手が、その豊満な膨らみへと伸びた。
手のひら全体で包み込もうとしても、指が到底届かないほどのボリューム。
吸い付くような肌触り。
指先を少し沈めれば、マシュマロよりも柔らかく、それでいて水風船のような反発力で押し返してくる。

「……んっ……ふぅ……！」

先生の手が動き始めると、キサキの口から甘い吐息が漏れた。
彼女は先生の肩にしがみつき、小柄な体を震わせる。

「……あっ、そこ……っ。先生の手、熱い……。……んんっ！」

指先が敏感な先端を掠めるたびに、ビクンと体が跳ね、湯面が波打つ。
「のじゃロリ」特有の威厳ある態度はどこへやら、快楽に蕩けた表情で、彼女は先生に全て

を委ねていた。
だが、キサキはただ弄ばれるだけではない。
彼女は、さらに大胆な行動に出た。
先生の頭を抱き寄せ、自分の胸元へと誘ったのだ。
「……のう、先生。……赤子のように、甘えてみぬか？」
母性溢れる、慈愛に満ちた声。
だが、そこに含まれる背徳感は計り知れない。
目の前には、湯気で濡れそぼり、血管がうっすらと透けて見えるほどの白肌と、圧倒的な質量。
甘い香りが鼻孔をくすぐる。
「……妾のこれで、喉を潤すがいい。……んっ、ほら……」

彼女の言葉に導かれるまま、先生は目の前の果実に口づけ、そして含んだ。
舌先で転がし、吸い上げる。

「……ああっ！　……んくっ……ふあぁ……ッ！」

静かな露天風呂に、キサキの高い嬌声が反響する。
彼女は先生の髪をくしゃくしゃと掴み、背中を反らせた。

「……すごい、吸いつきじゃ……。先生、そんなに……妾のが、美味いか……？　……んんっ、ちゅぅって……音が、響いて……恥ずかしい、はずなのに……ぞくぞくするのじゃ……っ」

視覚的な刺激も凄まじい。
先生が吸い付くたびに、巨大な胸は形を変え、吸われている方と反対の胸が揺れ動く。
キサキの顔は快楽で紅潮し、目はとろんと潤み、口元からは銀の糸が引いていた。

「……はぁ、はぁ……っ。先生……もっと、強く……。妾を、壊すくらいに……っ」

彼女はもう、「門主」の顔などしていない。
ただ先生に愛され、その身を捧げることに喜びを感じる、一人の少女だった。
自分の自慢の胸が、愛する男によって形を変えられ、愛で尽くされている。
その事実に、キサキの心も体も、かつてないほどの充足感で満たされていく。

「……先生。……愛しておるぞ。……妾の、全てで……」

湯煙の中で交わされる、熱い口づけ。
舌と舌が絡み合い、唾液を交換し合う。
下半身の熱も、限界まで高まっていた。

「……もう、我慢できぬな。……先生、続きは……部屋で、たっぷりと……」

キサキは息も絶え絶えに、先生の耳元で囁いた。
その瞳には、今夜は決して寝かせないという、淫らな決意が宿っていた。

濡れた浴衣を羽織る間も惜しいほどに、二人の体は火照りきっていた。

第３章：月明かりの甘い毒、溢れる蜜

部屋に戻った二人は、濡れた髪を乾かす間も惜しむように、敷かれたばかりの布団の上へと倒れ込んだ。

乱れた浴衣の襟元からは、湯気で上気した肌が覗き、互いの体温が直接伝わってくる。

「……ん、はぁ……っ。先生、少し落ち着かぬか。……そんなに急いては、折角の趣が台無しじゃぞ？」

キサキは、先生の胸板を小さな手で押し返しながらも、その瞳は潤み、口元はだらしなく緩んでいた。

言葉とは裏腹に、彼女の体は先生の愛撫を求めて火照りきっている。

浴衣の帯はすでに緩み、胸元が大きくはだけていた。

温泉でたっぷりと愛でられた、あの規格外の果実が、重力に従って横に流れ、たわわな曲線を描いている。

「……ふふ、そんなに妾のが忘れられんのか？ 仕方ないやつじゃのう……」

先生の視線が胸元に吸い寄せられているのを見て、キサキは得意げに微笑んだ。
彼女は自ら浴衣の前をさらに広げ、その圧倒的な白磁の肌を月明かりの下に晒け出す。

「……良いぞ。今宵は、先生の望むままに。……妾の全てを使って、奉仕してやろう」

そう言って、彼女はゆっくりと体を起こし、先生の足の間に座り込んだ。
先生の浴衣の裾をまくり上げると、そこにはすでに、熱を帯びて硬直したモノが、脈打ちながら屹立していた。

小さな手のひら、大きな熱情

「ほう……。これはまた、随分と元気なことじゃ。温泉であれだけ出したというのに、まだこれほどまでに猛っておるとはな」

キサキは、その赤黒く充血した先端を、興味深そうに指先でつついた。
ビクン、と竿が跳ねると、彼女は楽しそうにくすりと笑う。

「……可愛い反応じゃ。普段の澄ました顔からは想像もつかぬのう」

彼女の小さな手のひらが、熱い肉塊を包み込んだ。
指が到底回りきらないほどの太さ。
その質量感に、キサキは少しだけ目を丸くした。

「……ん、これほどとは。……妾の手に余るのう」

しゅるり、と滑らかな動きで、彼女の手が上下にしごき始める。
柔らかい手のひらと、少しひんやりとした指先の感触が、熱を持った敏感な皮膚を擦り上げていく。

「……っ、はぁ……。先生、どうじゃ？　妾の手つきは。……んっ、ここかっ？　それとも、こっ

ちの筋張ったところか？」

彼女は、亀頭のカリ首を親指の腹で執拗に擦ったり、裏側の敏感なスジを爪先で軽く刺激したりと、巧みに快感のツボを探ってくる。

先生の口から漏れる苦悶の声を聞くたびに、キサキの嗜虐心と奉仕の喜びが満たされていく。

「……ふふっ、良い声じゃ。もっと聞かせておくれ。……先生の理性が溶けていく様を見るのは、何よりも愉快じゃからな」

舌先の舞、濡れる音色

やがて、手だけの刺激では物足りなくなったのか、キサキはゆっくりと顔を近づけた。

熱い吐息が、敏感な先端にかかる。

「……さて。次は、もっと直接的に可愛がってやろう」

彼女は小さく口を開けると、赤い舌先をちろりと覗かせた。
そして、まるで高級な菓子を味わうかのように、先端の鈴口を丁寧に舐め上げた。

「……んっ、ちゅ……、れろ……っ」

ジュルリ、と粘着質な水音が、静かな部屋に響く。
キサキは上目遣いで先生を見つめながら、その屹立したモノを根本まで口の中に迎え入れた。

「……んぐっ……ふぅ……っ、大きい……。口の中が、いっぱいに……っ」

彼女の小さな口内は、先生のモノで完全に塞がれた。
熱い粘膜と、巧みに動く舌が、竿全体に絡みつく。
喉の奥を突かれるたびに、キサキは苦しそうに眉を寄せながらも、決して離そうとはしなかった。

「……んむっ、じゅるっ……、んくっ、はぁ……っ。……先生の、味……。熱くて、硬くて……、癖になりそうじゃ……」

頬を膨らませ、懸命に頭を前後させる彼女の姿は、献身的でありながら、どこか淫靡な背徳感を漂わせていた。

時折、口から離しては、唾液で濡れて光るそれをうっとりと眺め、再び吸い付く。

その反復が、先生の理性を削り取っていく。

圧倒的質量の包容、白き挟撃

「……んっ、ふぅ……。口も、少し疲れてきたのう。……ならば、とっておきの技を見せてやろうか」

キサキは口を離すと、ニヤリと笑った。

そして、自身のチャイナ服を押し上げていた、あの規格外の双丘を両手で持ち上げ、先生の目の前に突き出した。

「……ほれ。これが良いのであろう？　先生が大好きな、妾の自慢の胸じゃ」

彼女は、左右からその豊かな膨らみを寄せ集め、深い谷間を作り出した。
そこに、唾液で濡れて光る先生のモノを、ゆっくりとあてがう。

「……んっ、ふふ……。挟んでやるぞ。……覚悟するが良い」

むにゅん、という柔らかな音と共に、硬直した肉棒が、白くなめらかな肉の峡谷へと沈んでいった。
圧倒的な密着感。
四方八方から押し寄せる、温かくて柔らかい弾力。

「……どうじゃ？　妾の胸の感触は。……んっ、はぁ……っ。熱いのが、直に伝わってきて……、妾の胸も、おかしくなりそうじゃ……」

キサキは、その豊満な胸を上下左右に動かし、激しく擦り合わせ始めた。

巨大な乳房が形を変え、波打ちながら、先生のモノを包み込み、しごき上げる。
視覚的なインパクトも絶大だ。
あの威厳ある門主が、自らの胸で男の欲望を処理している。
その光景が、さらなる興奮を呼び起こす。

「……あっ、んっ！　すごい……っ。先生の、中で……ビクビクしておるぞ……。……んんっ、気持ち良いのか？　そうか、そうか……っ」

キサキの顔も、快楽で紅潮していた。
自分の胸が先生に快感を与えているという事実が、彼女自身の興奮も高めているのだ。
先端が乳首を擦るたびに、彼女の口から甘い嬌声が漏れる。

「……ああっ！　もう……、限界、なのじゃな？　……ふふっ、良いぞ。……出してしまえ。妾の胸に、先生の全てを……っ！」

先生の腰が浮き上がり、限界が訪れる。

キサキはそれを察知すると、素早く胸の拘束を解き、今まさに放たれようとしている先端を、再び自身の口で迎え入れた。

「……んっ、んぐっ……！！」

ドピュッ、ドピュッ、と勢いよく放たれた白濁した液体が、キサキの喉の奥へと注ぎ込まれる。
彼女は目を見開き、ビクンと体を震わせながらも、一滴もこぼすまいと、懸命に喉を鳴らした。

「……んくっ、ごきゅっ……、んん……っ、ぷはぁ……っ」

全ての放出が終わると、キサキはゆっくりと口を離した。
口角から、白い液体が糸を引いて垂れる。
彼女はそれを舌先でペロリと舐め取ると、恍惚とした表情で先生を見つめた。

「……ふふっ、全部……飲んでしもうた。……熱くて、濃くて……。これが、先生の……」

彼女の頬は上気し、瞳は潤み、完全に「雌」の顔をしていた。
そこにはもう、玄龍門の門主としての威厳は欠片もない。
ただ、愛する男に満たされた、一人の少女の姿があるだけだった。

「……はぁ、はぁ……っ。……さて。先生もスッキリしたことじゃし、これで終わり……とは、いかぬのう？」

キサキは、まだ熱の冷めやらぬ体で、先生の上に覆いかぶさった。
その瞳には、さらなる欲望の火が灯っていた。

「……次は、妾の番じゃ。……たっぷりと、可愛がってもらうぞ？」

第4章：褥に咲く、秘密の蕾

重厚な木の扉が閉まると、世界には二人だけの音が残された。

畳の上に敷かれた布団の白さが、薄暗い行灯の光に照らされて妖しく浮かび上がっている。
キサキは先生の手を引いたまま、くるりと振り返った。
その瞳は、温泉の熱気とは違う、もっと奥底から湧き上がる情動で潤んでいた。

「……ここが、今宵の終着点というわけじゃな」

彼女は背伸びをするようにして、先生の首に腕を回す。
その拍子に、乱れた浴衣の隙間から、こぼれ落ちんばかりの豊満な双丘が、先生の胸板に押し当てられた。
柔らかく、温かく、そして圧倒的な質量。
薄い布一枚を隔てただけの感触に、互いの心臓の音が伝播し合う。

「……先生。もう、言葉はいらぬぞ」

トン、と小さな体が先生を押し倒す。
抵抗する気など端からない先生が布団の上に沈むと、キサキは優雅な動きでその上に跨っ

た。
黒髪がサラリと流れ落ち、先生の頬をくすぐる。
逆光になった彼女のシルエットは、女神のようでもあり、夜を統べる魔性のようでもあった。

「……ふふ。見下ろすのも、悪くない眺めじゃ」

キサキはゆっくりと腰を下ろしていく。
彼女の膝が布団を捉え、その豊かな太ももが先生の腰を挟み込む。
そして、浴衣の帯はすでに解かれ、彼女の上半身は完全に顕わになっていた。
重力に従って揺れる、白くなめらかな果実。
その先端は、興奮と外気への羞恥で、甘いベリーのように赤く熟している。

「……ほら、先生。目が欲しがっておるぞ？　妾の……この体を」

彼女はわざとらしく身を乗り出し、その圧倒的なボリュームを先生の顔の目前へと近づけ

た。
視界すべてが、彼女の白い肌と甘い香りで埋め尽くされる。
「……んっ、はぁ……。先生の吐息が、かかって……。くすぐったいのじゃが……悪くない」
キサキは自らの胸を、先生の顔に擦り付けるように動かし始めた。
ムニュ、ムギュッ、と肉が形を変える音が、鼓膜に直接響く。
柔らかいのに弾力があり、吸い付くような肌。
先生がたまらずその双丘に顔を埋めると、キサキは愛おしそうに先生の頭を抱きしめた。
「……よしよし。……存分に甘えるがよい。今、この瞬間……妾は玄龍門の門主ではない。ただの……先生の女じゃ」
重なり合う熱、溶ける理性
「……んっ、ぁ……っ！　先生、そこは……っ！」

先生の手が、彼女の滑らかな背中から腰、そして秘められた場所へと這い進むと、キサキの体が一際大きく跳ねた。
彼女は快感に耐えるように背中を反らす。
その動きに合わせて、豊かな胸が激しく波打ち、艶めかしい曲線を描く。

「……あっ、やっ、……そんなに触られたら……妾、おかしくなって……っ」

強気な口調は鳴りを潜め、口から漏れるのは甘く切ない喘ぎ声ばかり。
キサキは潤んだ瞳で先生を見つめ、懇願するように腰をくねらせた。

「……もう、焦らすでない。……先生も、限界なのであろう？ ……妾もじゃ。……体が、奥が……先生を求めて、疼いて仕方がないのじゃ……っ」

彼女は先生の手を導き、互いの熱源を密着させる。
濡れた秘所が、先生の硬直した熱に触れた瞬間、キサキはゾクゾクと震え上がり、深い溜息を漏らした。

「……あぁ……っ。熱い……。先生の熱が、伝わってくる……。……のう、先生。……一つに、なろう？」

その言葉は、合図だった。
キサキはゆっくりと、慎重に腰を沈めていく。
ふわりと舞う浴衣の裾。
露わになる白磁の肌。
そして、二人が繋がる瞬間――。

「……んっ、んぐぅ……っ！！」

キサキが眉を寄せ、苦悶と快楽が入り混じった声を上げる。
満たされていく感覚。
異物が入り込む違和感が、次第に愛おしい充溢感へと変わっていく。
彼女は先生の肩に爪を立て、その深い繋がりを全身で受け止めた。

「……はぁ、はぁ……っ。……入っ、た……。先生が……妾の中に……っ」

動き出した二人の影が、障子に揺らめく。
キサキは先生の上で、その小柄な体を懸命に弾ませた。
動くたびに、大きく揺れる胸が、視覚的な快楽を暴力的なまでに叩きつけてくる。

「……あっ、んっ！　……先生、深い……っ！　そこっ、深いっ……！」

バシン、バシンと肌が打ち付け合う音が、部屋の静寂を塗り替えていく。
キサキの髪は乱れ、汗ばんだ肌は月明かりを反射して光り輝いていた。
彼女はもう、言葉を紡ぐ余裕などない。
ただひたすらに、先生との快楽を貪り、愛を確かめ合う獣となっていた。

「……んあぁっ！　す、ごい……っ！　突き上げ、激し……っ！　妾、こわれ、ちゃう……っ！
……でも、もっと……っ！　もっと、愛して……っ！！」

先生が腰を打ち上げるたびに、キサキの体は弓なりに反り、巨大な胸がプルンプルンと激しく踊る。
その姿はあまりにも淫らで、それでいて神々しいほどに美しい。

「……先生っ、先生ぇっ……！　好きっ、大好きじゃ……っ！　妾のすべてを、めちゃくちゃにしておくれ……っ！」

彼女の言葉に呼応するように、先生の愛撫も激しさを増す。
敏感な先端を指で弾かれ、胸を揉みしだかれ、キサキは完全に理性のタガを外された。
白目を剥きかけ、涎を垂らしながらも、彼女は腰を振ることをやめない。

「……あ、ああっ！　くるっ！　……先生、なにか、くるっ……！！」

白濁の絶頂、愛の証
限界は、唐突に訪れた。

高まりきった快楽が、火花のように弾ける。

「……んっ、くぅ……っ！　先生っ、出るっ……！　先生のも、全部……っ！　妾に、ぶちまけて……っ！！」

キサキの絶叫と共に、先生もまた、最期の箍を外した。

あふれ出る熱い奔流。

二人の体が硬直し、痙攣し、互いの存在を刻み込むように抱き合う。

「……んぎぃぃぃっ……！！　……あぁっ、あぁぁぁ……っ！！」

長い、長い絶頂の余韻。

キサキは力を失い、パタリと先生の胸の上に倒れ込んだ。

荒い呼吸だけが、部屋に響き渡る。

汗で濡れた髪が、先生の頬に張り付く。

「……はぁ、はぁ……。……やった、な……。先生……」

しばらくして、キサキが顔を上げた。
その顔は、涙と汗、そして愛液でぐしゃぐしゃになっていたが、これまでのどんな時よりも晴れやかで、美しかった。

「……すごかった……。頭が、真っ白に……。……ふふ。先生の愛、たっぷりと……受け止めたぞ」

彼女は満足げに微笑むと、先生の唇に、チュッと軽いキスを落とした。
その瞳には、深い信頼と、尽きることのない愛情が宿っていた。

「……少し、休もうか。……でも、夜はまだ……これからじゃからな？」

第5章：黎明の龍、刻まれる熱き誓い
障子の隙間から、薄藍色の朝の気配が忍び込んでいた。

まだ鳥の声も聞こえぬ、黎明の静寂。
けれど、乱れた布団の上だけは、昨夜の熱が冷めるどころか、再び熾火のように燃え上がろうとしていた。

「……ん……っ。先生、起きているか？ ……嘘をつくな。その呼吸、その視線……。まだ、足りておらぬのであろう？」

キサキは先生の上に跨ったまま、妖艶に微笑んだ。
夜明け前の薄暗がりの中、彼女の白磁の肌がぼんやりと浮かび上がる。
昨夜、何度も愛でられ、形を変えるほどに揉みしだかれたその豊かな双丘は、わずかな動きに合わせてたぷん、と重たげに揺れた。
先端は、まだ昨夜の興奮を記憶しているかのように、ツンと尖って主張している。

「……ふふ。正直な体じゃ。……妾も同じぞ。一度知ってしまった快楽は、そう簡単に忘れられるものではないらしい」

彼女はゆっくりと腰を沈める。
濡れた秘所が、先生の熱く昂ぶったモノを捕らえ、飲み込んでいく。

「……っ、んんっ……！　……あぁ……、やはり、凄い……。朝から、こんなに……っ」

二度目の結合。
一度目よりも道が開かれているぶん、より深く、より密着して、互いの存在を確かめ合える。
キサキは苦しげに、けれど歓喜に満ちた表情で天を仰いだ。

溶け合う境界、朝の微睡み
「……はぁ、あぁっ……！　先生、動くぞ……。……んっ、奥まで……っ！」

キサキは先生の胸に手をつき、自ら腰を振る。
小柄な体が上下するたびに、規格外の果実が先生の顔の目前で弾み、甘い香りを振りまく。
視覚、触覚、嗅覚のすべてが彼女に支配される。

「……んっ、どうじゃ？　妾の中は……。……昨夜よりも、締め付けておるか？　……先生を離したくないと、体が勝手に……っ」

グチュ、グチュ、と水音が部屋に響く。
それは卑猥でありながら、愛し合う二人の生きた証のようでもあった。
キサキの「のじゃ」という古風な口調が、喘ぎ声と混ざり合い、独特の背徳感を生み出す。

「……っ、そこ……！　先生、そこじゃ……っ！　こするな、そんなに……っ！　……あぁっ、頭が……また、おかしくなる……っ！」

先生が腰を突き上げると、彼女は「ひぐっ」と喉を鳴らし、ガクガクと体を震わせた。
巨大な胸が波打ち、汗ばんだ肌が擦れ合う。
門主としての威厳など、もうどこにもない。
ただ、愛する男に貫かれ、満たされる喜びに溺れる一人の「女」がいるだけだ。

「……先生、好きにしろ……。妾を、好きに……。……んっ、もっと激しく……！ 壊れるくらいに、愛して……っ！」

龍の昇天、白濁の誓い。
互いの呼吸が重なり、限界が近づく。
キサキは先生の首に腕を回し、その豊かな胸で先生の顔を包み込むようにして抱きついた。
心臓の音が、直接響いてくる。

「……先生、くる……っ。もう、我慢できぬ……っ。……一緒に、イこう……？」

甘く、とろけるような誘い。
先生もまた、理性の堤防が決壊する。
最奥へと突き込み、熱い奔流を注ぎ込む準備をする。

「……ああっ、先生っ！ 先生ぇっ……！！」

ドクン、と脈打つ感覚と共に、全てが解き放たれる。
先生のすべてが、キサキの深い場所へと注がれていく。
彼女は背中を反らし、声にならない絶叫を上げた。

「……んぎぃっ！ ……あ、熱いっ……！ 先生のが、いっぱい……っ！ ……中、焼けるぅっ……！！」

ビクビクと痙攣する彼女の胎内が、注がれた熱を貪るように収縮する。
長い、長い絶頂。
頭の先から爪先まで、痺れるような快感が駆け抜けていく。

波が引いていくように、部屋に静寂が戻ってきた。
けれど、それは虚無ではない。満ち足りた、幸福な静寂だ。
キサキは先生の胸に顔を埋めたまま、荒い息を整えていた。

「……はぁ、はぁ……。……ん……。凄かった……」

しばらくして、彼女は顔を上げた。
汗で前髪が額に張り付いているが、その瞳は宝石のように輝いている。
彼女は先生の頬を撫で、うっとりとした表情で囁いた。

「……先生。気持ちよかったぞ。……今まで生きてきた中で、一番……」

素直な言葉。
飾らない称賛。
それが何よりも、先生の胸を打つ。

「……先生も、そうか？　妾で……良かったか？」

先生が頷き、愛を伝えると、キサキは花が咲くように破顔した。
そして、名残惜しそうに身を離す。
繋がっていた場所から、銀色の糸と、白濁した愛の証がこぼれ落ちる。

彼女はそれを恥じらうことなく、誇らしげに見つめた。

「……ふふ。たっぷりと、もらったな。……これは、先生が妾を愛してくれた証拠じゃ」

朝陽が完全に昇り、部屋を明るく照らし出した。

二人は湯を使い、身支度を整える。

黒いチャイナ服に袖を通し、龍の刺繍を身に纏うと、キサキの雰囲気がまた少し変わる。

いつもの「玄龍門の門主」としての顔つきだ。

けれど、その纏う空気は以前よりもずっと柔らかく、そして艶やかだった。

「……さて。夢のような時間は終わりじゃ。山海経に戻らねばな」

彼女は窓の外、遠くの山々を見つめる。

そこには、彼女が背負うべき日常と、守るべきものたちが待っている。

「名残惜しいが……、嘆くことはあるまい。妾たちは、もう……以前の『門主と先生』とい

うだけの関係ではないのじゃから」

キサキは振り返り、先生の元へと歩み寄る。
そして、背伸びをして、先生の耳元に唇を寄せた。

「……いつでも、会いに来い。執務室でも、どこでも……。二人きりになれば、妾はまた……先生だけの『キサキ』になる」

最後に一度だけ、唇を重ねる。
それは激しいものではなく、約束を封じるような、優しい口づけだった。

「……行こうか、先生。……これからも、頼りにしておるぞ」

旅館を出ていく二人の背中には、朝の光が降り注いでいた。
その距離は、来る時よりもずっと近く、見えない絆で固く結ばれているようだった。
龍は天に昇り、その懐には、かけがえのない宝物を抱いていた。

エピローグ：龍の棲家、蜜月に溺れる執務机

玄龍門の執務室。重厚な黒檀の扉が、カチャリと重たい音を立てて施錠された。
山海経の喧騒は、分厚い壁と扉によって遮断され、部屋には静寂と、ほのかに甘い香煙の匂いだけが漂っている。

先生が振り返ると、そこにはいつもの高い椅子ではなく、執務机の縁に腰掛け、不敵な笑みを浮かべるキサキの姿があった。
黒いチャイナ服の裾から伸びる白い足が、ぶらぶらと遊ぶように揺れている。

「……ふふ。ようやく二人きりになれたな、先生」

彼女は手招きをしながら、蠱惑的な瞳で先生を見上げた。
その表情には、組織を統べる冷徹な門主の面影はない。
ただ、愛する男の訪れを待ちわびていた、一人の艶めかしい雌の顔があるだけだ。

「書類仕事も片付いた。……部下たちも下がらせた。今のここには、邪魔なものは何もない」

キサキは先生のネクタイを指先で掴み、ぐいと自分の方へ引き寄せる。
鼻先が触れ合うほどの距離。
彼女の吐息が、熱く、甘く、先生の理性をくすぐる。

「……のう、先生。あの温泉宿での夜を……忘れたとは言わせぬぞ？　山海経に戻ってからというもの、妾の体は……うずいて、うずいて、仕事も手につかぬほどじゃった」

彼女は先生の手を取り、自らの胸元へと導いた。
チャイナ服特有の胸元の開き。
そこには、小柄な体躯には不釣り合いなほどに成長した、圧倒的な質量の果実が押し込められている。
布越しでも伝わる、火照った体温と、驚くべき柔らかさ。
先生の手が触れた瞬間、キサキは「んぅ……」と甘い声を漏らし、陶酔したように目を細め

た。

「……ここが、寂しいと泣くのじゃ。……先生の手で、愛でてくれと……」

彼女は自らチャイナ服のボタンに手をかけ、ゆっくりと外していく。
一つ、また一つと留め具が外れるたびに、抑圧されていた白磁の双丘が、弾けんばかりの勢いで露わになっていく。
ボンッ、という幻聴が聞こえそうなほどの解放感。
露わになったその胸は、血管が透けるほどに白く、そして先端はすでに桜色に熟し、期待に震えていた。

「……どうじゃ？　執務室で見る妾の裸体は。……背徳の味がして、興奮するであろう？」

キサキは両腕で自身の胸を抱え上げ、先生に見せつけるように突き出した。
むにゅり、と肉がたわみ、深い谷間が形成される。

「……まずは、挨拶代わりじゃ。……先生のその元気なモノを、妾のこれで癒してやろう」

先生がズボンのベルトを緩め、すでに限界まで膨れ上がった熱を取り出すと、キサキは嬉しそうに目を輝かせた。

そして、待ちきれないといった様子で、その豊かな胸の谷間に、先生の熱を挟み込んだ。

「……んっ……！　はぁ……っ、熱い……。先生のが、妾の胸に……沈んでいく……」

圧倒的な包容力。

四方八方から押し寄せる、マシュマロのような柔らかさと、吸い付くような肌の感触。

キサキは、自身の胸で先生のモノを完全に包み込むと、ゆっくりと、そしてねっとりと動き始めた。

「……ふふっ。見えるか、先生？　……先生の太いのが、妾の胸に埋もれて……隠れてしもうたぞ」

彼女は視覚的な興奮を煽るように、わざと胸を大きく動かし、先端を擦り上げる。
ズズッ、ズズッ、という肉と肉が擦れ合う音が、静かな執務室に響く。
冷房の効いた部屋のはずなのに、二人の周りだけ熱気が渦巻いていた。

「……んくっ、はぁ……っ！　固い……。スジが、浮き上がっておるのが……胸の皮膚越しに、わかる……っ」

キサキの顔が紅潮し、吐息が荒くなる。
先生に奉仕しているはずが、彼女自身もその刺激に酔いしれているのだ。
敏感な乳房の内側で、硬直した肉棒を転がす感触。
それが、彼女の脳髄を痺れさせる。

「……のう、先生。気持ち良いか？　……妾の、この大きすぎる胸は……先生のためにあったのじゃな。……こうして、先生を気持ちよくさせるために……っ」

彼女の手の動きが激しくなる。

唾液と愛液を混ぜたローションを使わずとも、滲み出る汗と熱気で、滑りは最高潮に達していた。
先端が乳首を掠めるたびに、キサキの背中がビクンと跳ね、口から可愛らしい悲鳴が漏れる。

「……っ、あぁっ！　乳首、擦れて……っ！　……んんっ、先生っ、だめっ……！　妾まで、イきそうじゃ……っ！」

しかし、彼女は動きを止めない。
むしろ、先生の腰を両足で挟み込み、逃がさないように締め上げる。

「……出すが良い……。先生の白いのを、妾の胸に……！　……全部、受け止めてやるから……っ！」

先生の腰が浮き、限界が訪れる。
キサキはそれを感じ取ると、胸の圧力を限界まで強めた。

「……っ、出せっ！……先生っ！！」

ドピュッ、ドピュッ！
勢いよく放たれた白濁液が、キサキの顔と、その自慢の胸に飛び散る。
熱い液体が、白い肌を汚し、垂れていく。
キサキは目をつぶり、その熱を全身で噛み締めていた。

「……んぅ……っ。……はぁ、はぁ……っ。……すごい量じゃ……」

薄目を開けた彼女は、自身の胸にかかった愛の証を指ですくい、ぺろりと舐め取った。

「……んっ。……濃いのう。……さて、これで終わりと思ったか？」

キサキは、まだ収まりきらない熱を孕んだ瞳で、先生を睨みつけた。
むしろ、今の行為は火に油を注いだに過ぎない。

彼女の下半身は、すでに待ちきれないほどに濡れそぼっていた。

「……ここからが、本番じゃ。……先生。妾の奥が、乾いて痛いのじゃ。……責任を、取ってもらおうか？」

彼女は執務机の上に仰向けに寝転がると、その白い両足を大きく広げた。
スカートが捲れ上がり、秘められた花園が露わになる。
そこはすでに、愛液でぐっしょりと濡れ、先生を迎え入れる準備が整っていた。

「……さあ、来ておくれ。……玄龍門の門主としてではなく……先生の女として。……妾を、貫いてくれ」

先生がその間に身を沈め、濡れた入り口に先端をあてがう。
キサキは期待に震え、爪先を丸めた。

「……んっ、焦らすな。……早く、早く……っ！」

ズプリ。
重たい音と共に、先生の楔が、キサキの最奥へと侵入を開始する。

「……あ、ぎっ……！！ ……んぁぁぁぁっ……！！」

キサキがのけぞり、机の縁を強く掴む。
きつい。あまりにもきつい締め付け。
しかし、その窮屈さが、この上ない快楽となって脳を揺さぶる。

「……はぁ、あぁっ……！ 入った……！ 先生のが、根元まで……っ！ ……お腹、いっぱいじゃ……っ」

先生が動き始めると、キサキは声を上げて乱れ始めた。
執務室の机が、ギシギシと音を立てて軋む。
その背徳感が、さらに興奮を煽る。

「……っ、あぁっ！　そこっ、深いっ……！　先生っ、激しい……っ！　……んぎぃっ！　執務室で、こんな……っ！」

バシン、バシンと肌が打ち付け合う音が響く。
キサキの豊かな胸は、激しいピストン運動に合わせて、顔を覆うほどに大きく揺れ動いていた。
彼女は涙目で先生を見つめ、懇願するように腰を振る。

「……先生、もっと……っ！　もっと奥を……！　妾の芯を、叩いて……っ！　……あぁっ、おかしくなるっ！　門主とか、もうどうでもいい……っ！　……先生の、肉便器でいいからぁっ……！！」

理性のタガが完全に外れた彼女の言葉は、淫らで、そして愛おしい。
先生もまた、彼女の言葉に煽られ、獣のように腰を打ち付ける。

「……あ、ああっ！　くるっ！　また、くるっ……！　……先生、出してっ！　中に、たっぷりと……っ！　妾のお腹に、先生の種を……全部っ！！」

「……あぁっ、んんんっ！！」

二人の絶叫が重なる。
先生はキサキの最奥に、これ以上ないほど深く突き刺さり、その熱い奔流を叩き込んだ。
ドクン、ドクンと脈打つ肉棒から、生命の素が注ぎ込まれる。

「……んぎぃぃぃっ……！！　……あ、熱いっ……！　お腹、焼けるぅっ……！　……入って、くる……っ！　先生のが、全部……っ！」

キサキは白目を剥きかけ、涎を垂らしながら、ビクビクと痙攣する体でその全てを受け止めた。
子宮の口が、注がれた熱を飲み込もうと、貪欲に収縮する。

長い、長い絶頂の余韻。
二人の体は重なり合ったまま、荒い呼吸だけが部屋に響いていた。

「……はぁ、はぁ……っ。……んぅ……」

しばらくして、キサキがとろんとした瞳を開けた。
結合部はまだ繋がったままで、時折ピクリと跳ねている。

「……先生。……愛しておるぞ」

彼女は汗で濡れた先生の額に、優しく口づけをした。
その表情は、憑き物が落ちたように穏やかで、そしてどこまでも幸せそうだった。

「……ふふ。これでは、仕事に戻るのに……少々時間がかかりそうじゃな。……まあ良い。
今日はもう、このまま……先生と情眠を貪るとしようか」

キサキは先生の首に腕を回し、その豊かな胸に先生の顔を埋めさせた。
執務室の窓の外では、山海経の日常が続いている。
だが、この扉の内側だけは、二人だけの甘美な楽園だった。

～完～